

月刊

2018

3
月号

みんぱく

特集

万博資料

収集団



特別展縁起 野林厚志
万博から民博へ 石毛直道
万博のあとに民博を 松原正毅
梅棹忠夫アーカイブズに見る収集団の奮闘録 内田吉哉
未来から見た過去への口惜しさ 吉岡 乾
本館展示でEEM資料を見る 丹羽典生

橇を作る

極地での旅行には橇が欠かせない。近年、極地で徒歩旅行をおこなう冒険家はほぼ一〇〇パーセント、プラスチック製のポート型橇を使用しているが、私は木材で自作したものを使っている。グリーンランド北部では現在でも犬橇が生活の足として利用されており、彼らに作り方を教えてもらって覚えたイヌイット仕込みの橇だ。今年は三月にグリーンランドからカナダへ徒歩でわたる計画にしている。昨冬、厳冬の極夜時期の探検ではブナ材で作った頑健な橇を使用した。ブナはちよつと重すぎたので、今年には日本にいるうちに檜材で作るつもりだ。

木橇とポート型の橇、それぞれ一長一短あるが、総合的に見ればポート型のほうに軍配があがるだろう。軽量なだけではない。海水の上を移動する北極の旅の場合、乱氷帯での引っかかりのなさを考えるとポート型のほうがかなり有利だ。多くの冒険家が使っていることには、それなりの理由があるのである。しかし私は自作の橇にこだわりたい。木橇の場合、壊れたときに現場で応急修理ができるというのが表向きの理由だが、それよりも橇を制作するというプロセス自体に価値があると思うからである。

橇を作って旅を続けるうち、私は制作という行

角幡 唯介

プロフィール
1976年北海道生まれ。作家、探検家。早稲田大学卒業。『空白の五マイル』（集英社）で大宅壮一ノンフィクション賞、開高健ノンフィクション賞、梅棹忠夫・山と探検文学賞、『アグルーカの旅』（集英社）で講談社ノンフィクション賞など受賞多数。最新刊は、極夜の北極圏を80日間にわたり探検しつづけた『極夜行』（文藝春秋）。

為には実存的な意味があると気が付くようになった。特に命がかかった冒険旅行の現場で、それは言える。万が一、旅の最中に橇が壊れたら移動は不可能となり、文字通り命にかかわる事態となるだろう。極地旅行において橇は命を支える切実な装備だ。そのような装備を自分で制作すると、それは冒険行為の核心に触れる重要なプロセスとなる。自分で作ってそれが壊れたら死ぬのだから、橇を自作すること自体に冒険の重要原則である自己責任の概念が実現されるのだ。そのため橇を自作すると、その橇には既成のプラスチック製品にはない魂が込められることになる。ちよつと感覚的な話になるが、橇を自作することで、その橇は、単なる橇という道具の範疇を超えて、私自身の私性の宿った分身のようなものとなり、旅によって実現される私の世界は確実に深まりを増すのである。

これから材を発注して鋸で切断して鉋で削っていくが、どの材がいいか検討している時点で旅は始まっている。ぐさぐさに積みあがった乱氷帯を乗り越えるシーンを想像しながら橇を作ることには、言いしれない喜びがある。

月刊 みんぱく

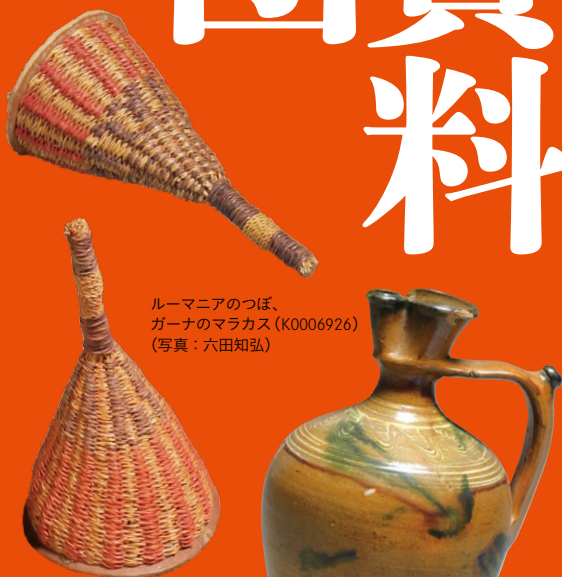
3月号目次

- | | |
|---|--|
| <p>1 エッセイ 千字文
橇を作る
角幡 唯介</p> <p>特集 万博資料収集団</p> <p>2 特別展縁起
野林 厚志</p> <p>4 万博から民博へ
石毛 直道</p> <p>5 万博のあとに民博を
松原 正毅</p> <p>7 梅棹忠夫アーカイブズに見る収集団の奮闘録
内田 吉哉</p> <p>8 未来から見た過去への口惜しさ
吉岡 乾</p> <p>9 本館展示で EEM 資料を見る
丹羽 典生</p> | <p>10 OOLでみました世界のフィールド
中国の携帯用万能充電器
横山 廣子</p> <p>12 みんぱく Information</p> <p>14 想像界の生物相
ポリネシアの鳥人
印東 道子</p> <p>16 新世紀ミュージアム
プロイセン文化財 ベルリン国立博物館群
ヨーロッパ諸文化博物館
森 明子</p> <p>18 手芸考
被災地で手芸を「仕事」にする
金谷 美和</p> <p>20 ながなんちゃ
新地名誕生!
吉枝 聡子</p> <p>21 次号予告・編集後記</p> |
|---|--|

万博資料 収集団体

特別展縁起

野林厚志のぼしあつし 民博学術資源開発センター



ルーマニアのつば、
ガーナの馬拉カス (K0006926)
(写真：六田知弘)

一九七〇年の大阪万博。「太陽の塔」に展示する民族資料を集めるため、世界各地へと派遣された若者たちがいた。彼ら「万博資料収集団」の活躍や、収集団を組織し、支えた人たちの思いは、後のみんぱく設立へとつながってゆく。開館四〇周年記念特別展「太陽の塔からみんぱくへ——七〇年万博収集資料」で公開される収集資料やその収集にまつわるエピソードを紹介する。

会期 三月八日(木)——五月二九日(火)
会場 特別展示館

今から半世紀前、日本の民族学において特別な出来事があった。一九七〇年に開催された大阪万博のテーマ館のひとつであった太陽の塔の地下に展示するための民族資料の収集が世界規模でおこなわれたのである。この収集をになったのが、EEM (EXPO'70 Ethnological Mission、日本万国博覧会世界民族資料調査収集団)である。EEMが収集した資料の大半は現在、みんぱくに収蔵され、研究や展示に活用されている。

今回の特別展の目的は、当時の収集の足跡をたどりながら、これらの資料を紹介することである。一九六八年前後の各地域の状況、現地での収集活動の様子、収集資料と現在とのつながりを、ちょうど本館展示の順路と逆周りで、日

企画展から特別展へ

今回の特別展開催のきっかけは、二〇一八年春の太陽の塔の内部公開であった。太陽の塔内部公開にあわせ、みんぱくで関連事業が実施できないか検討した結果、太陽の塔の地下に展示されていた代表的な資料を紹介する企画展を構想した。

みんぱくの企画展は、ほりさげた研究の内容や成果を展示によって可視化するもので、対象となる地域や民族、主題がある程度、絞り込まれることが少なくない。本館の企画展示場は四〇〇平方メートルで、資料の大きさや形にもよるが、五〇〜六〇点くらいがおさまりがよい。いざ、EEMの展示会の準備の下ごしらえをし

本からオセアニアまでを周回しながら展示するともに、収集対象の中心であった仮面と彫像(七〇年大阪万博では神像として展示された)を一望できるコーナーを設けている。時代の転換点を感じさせる日本の農具、抜群の面白さの東南アジアの収集記、創造の力を味わえる東アフリカのマコンデ彫像、太陽の塔を彷彿とさせるオセアニアの彫像等々、ちよっとした世界収集旅行の気分を味わうとともに、人類の想像力と創造力の多様性を、世界の仮面と彫像から感じていただけているのではないかと期待している。

ようと、資料の規模を確認したところ、じつにその総数は二五〇〇点以上で、収集された国、地域は四七であることがわかった。これでは、企画展示場では話にならない。特別展として準備することを二〇一七年の秋の終わりに決断した。特別展示場の面積は、一四九〇平方メートル、資料も五〇〇点くらいはなんとか展示が可能である。ただし、準備期間は実質一年、奇しくもEEMが収集に費やせた時間とほぼ同じであった。

EEMの報告書と事務局資料

EEMが団体戦であったことに倣い、今回のMEM (Minpaku Exhibition Mission、筆者が心のなかでそうよんでいる)も団体戦でいくことにした。というよりも、そうでなければ、企画立案、実施は不可能だった。収集地域における調査、研究の実績があるみんぱく教員で実行委員会を構成し、みんぱくが収蔵している資料を展示するという、みんぱくの「資源」を十二分に活かした展示会を目指すことにした。

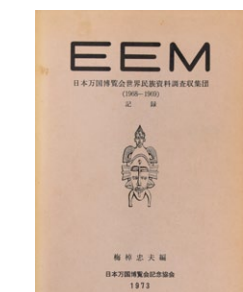
ところで、ミッションにはよりどころになるものがあつた方がよい。それが一九七三年、みんぱくが創設される前に刊行された『EEM——日本万国博覧会世界民族資料調査収集団(1968—1969)記録』である。編者の梅棹忠夫によってEEMの活動全体の顛末が述べられた後、収集の担当者から日本のEEM事務局へ寄せられた通信を再構成することによって、



ニューギニアで収集された装飾板
(写真：六田知弘)



オセアニア地域の収集を担当した班(石毛直道・松原正毅)の収集台帳(所蔵：松原正毅)



現地での収集の様子が生き生きと伝わってくる一級の調査旅行記集にしががっている。これを片手に実行委員のメンバーには、EEMの収集活動に挑んでもらうことになった。また、EEMの事務局が扱っていた当時の資料が、みんぱく内の梅棹資料室で大切に保管されていたことも幸運であった。これ無くしては今回の展示は成立しなかつたであろう。

EEM後のミッション

日本のみならず、世界的に見てもEEMほどの規模をもった民族資料の収集はないように思われる。ただし、それは収集旅行の域をこえてはしなかつた。EEMに欠けていたこと、それは、収集する対象についての堅実な研究、そして、EEMが収集におもむけなかつた地域を含む世界全体を網羅した研究と収集であった。このあらゆるミッションのために、研究者たちは、みんぱく設立という次なる一手を打ったのだろう。万博の跡地に民族学博物館をという岡本太郎の願いと、民族学博物館の設立をという民族学者たちの思いに加えて、世界の諸民族の社会や文化についての堅実な研究というミッションがみんぱく設立の原動力であつたのである。



70年大阪万博(写真提供：大阪府)

万博から民博へ

石毛直道 民博名誉教授

万博前史

一九六五〜七一年のあいだ、わたしは京都大学人文科学研究所の社会人類学研究室で助手をしていた。梅棹忠夫さんがわたしの上司であった。そのころ、梅棹さんは日本民族学会の国立民族



太陽の塔「過去・根源の世界」の展示風景(写真提供：大阪府)

学研究博物館設立促進委員会の委員として、泉靖一さんと民族学の博物館をつくる運動をしていた。また、日本で万国博覧会(万博)を開催することが決定する以前から、友人の小松左京さん、加藤秀俊さんたちと「万国博を考える会」を結成して、万博についての研究をおこなっていた。

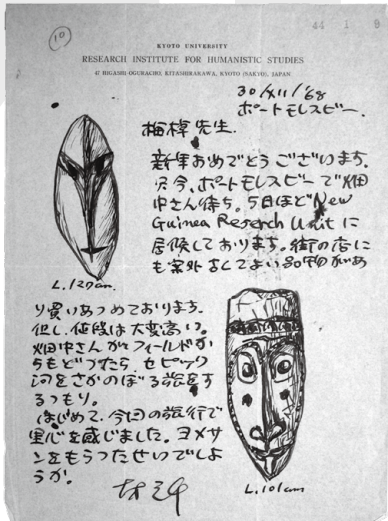
岡本太郎さんは民族学の見識をもつ芸術家である。岡本さんは、一九三〇〜四〇年のあいだパリに滞在し、絵画を勉強するだけではなく、パリ大学で美学などを学んだ。一九三七年にパリで開催された万博の跡地に、世界の民族文化を展示するミュゼ・ド・ロム(人類博物館)が開館すると、そこで開講した著名な民族学者であるマルセル・モースの授業に参加している。そのような経験から、岡本さんは日本に本格的な民族学博物館をつくるべきだという考えをもつようになった。

仮面と神像

一九七〇年に大阪で万博をおこなうことが決定すると、岡本さんがテーマ館のチーフ・プロデューサー、小松さんがサブ・プロデューサーに任命された。「人類の進歩と調和」を表現するテーマ

展示物を借りてきて使用するわけにはいかない。そこで、万博の展示のために世界の仮面と神像を収集することになり、岡本さんは泉さんと梅棹さんに相談をしたのである。

一九六八年に国際人類学民族学会議が日本で開催されたとき、世界の著名な民族学者を集めた、日本万国博覧会協会主催のパーティーで、岡本さんは「万博テーマ館で展示する仮面と神像は、将来開設される国立民族学博物館の基礎資料になるであろう。その収集に日本の若手民族学者が貴国を訪れたさいには協力してほしい」



収集時にパプアニューギニアから梅棹さんに送った手紙

という力強い演説をフランス語でおこなった。そして、梅棹さんと泉さんが中心になってEEMが結成され、一九六八年秋から六九年夏にかけて、約二〇人の団員が世界各地で収集に従事し、約二六〇〇点の民族資料を集めた。収集した資料は万博テーマ館での展示終了後、日本万国博覧会記念協会が保管していたが、民博が開館時にその一部を譲り受け、重要な展示品として活用した。これら万博のための収集資料は、現在では民博に移管されている。

万博のあとに民博を

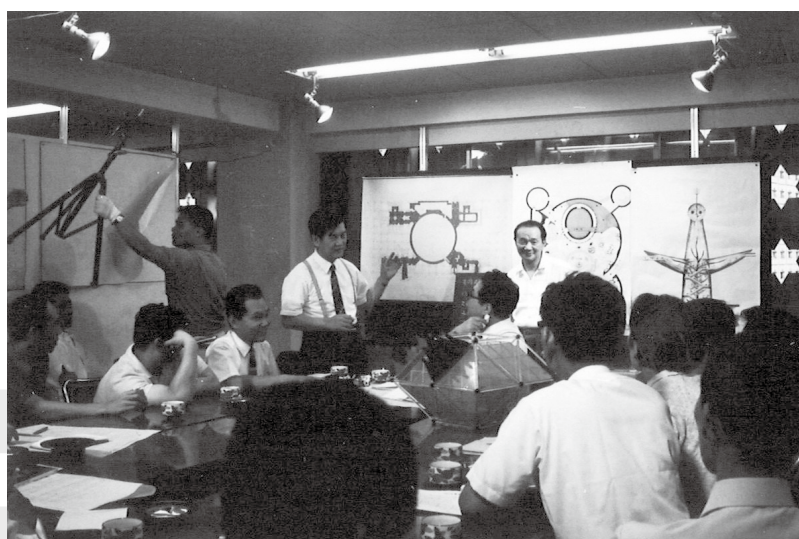
松原正毅 民博名誉教授

ひとつの思いが形をともなって具象化にまでいたるのは、至難の業といえる。なにかのことを達成するためには、天の時・地の利・人の和

がそろわなければならないともいわれる。国立民族学博物館の創設の前後の流れのなかにみずから身をおいていたひとりとして、こうしたこ

とばが改めて痛切に思いおこされてくる。国立民族学博物館の創設は、天・地・人がそろって実現した奇跡的な実績であったといつてよいだろう。

「万博のあとに民博を」という思いを人一倍いだいていたのは、造型家の岡本



太陽の塔の設計作業風景。中央右に立っているのが岡本さん、左は梅棹さん。あいだには小松さんが座っている(提供：公益財団法人岡本太郎記念現代芸術振興財団)

オセアニア班(石毛・松原)が収集したヴァヌアツの「割れ目太鼓」(K0006979)は、現在でもオセアニア展示の人気資料

夫京大助教に共有される。この共有された思いが、一九六八年夏ごろに日本万国博覧会世界民族資料調査収集団 (EXPO'70 Ethnological Mission) として具体化していった。わたし自身 (当時京都大学大学院文学研究科博士課程) も、このEEMのオセアニア班の一員として参加している。参加したのは、「万博のあとに民博を」というスローガンに共鳴したからである。もちろんこの時点では、わたしも含めてEEMにかかわったほとんどの人が国立民族学博物館構想が実現するとは思っていなかった。ましてや万博跡地に民博が創設されるのは、夢物語にちかいうものであった。

一九六八年一月三日、石毛直道さん (当時京都大学人文科学研究所助手) と台北で合流した。台北から香港をへて、サラワク (ボルネオ) にわたる。サラワクには、一九六三年から六四年にかけてわたしはフィールドワークのため滞在したことがある。サラワクで民族資料収集の第一歩をふみだしたあと、インドネシア、ニューギニア、メラネシア、ポリネシア、ミクロネシアなどの旅を続けた。帰国は、六九年三月中旬になる。

民族資料収集は、制約の厳しい旅であった。厳しいのは、予算と日程である。オセアニア班の収集予算は、二〇〇万円余りであった。一ドルが三六〇円の時代である。この予算の範囲内で、資料の購入費や輸送費などをまかなわなければならぬ。予算よりも厳しかったのは、日

程である。ひとつの地点に数日間から二週間くらいしか滞在できない。広い地域をカバーしなければならぬからだ。

制約は厳しかったが、楽しい旅であった。広い地域でおこっている現象を、同時代的に見ることができたのは何よりと思っている。カリマ



パプアニューギニアでの収集当時の写真。集会所 (上) とサトウキビを運ぶ女性たち (下) (撮影: 石毛直道、提供: 公益財団法人味の素食文化センター)

ンタンやニューギニア、メラネシアなどでくぶりはじめていたさまざまな自立を目ざす動きを、間近に感じることができたからである。それとともに、将来的な保証はなかったが、民族学の拠点作りを目ざす流れに参加している充足感があった。

梅棹忠夫アーカイブズに見る収集団の奮闘録

内田 吉哉 民博機関研究員

国立民族学博物館の梅棹資料室に、EEMに関する資料が所蔵されている。世界各地に派遣された団員と、日本に残って調査活動を統括した梅棹忠夫氏 (京都大学人文科学研究所助教授・当時)、そして京都大学の梅棹研究室に置かれた事務局とのあいだで交わされた通信や書類等である。その内容は総点数二五三三点にのぼり、資料を時系列に沿ってたどっていけば、収集団の活動を追体験することができる。

若き人類学者たちの肉声

収集団の活動記録は、出発前のミーティングから始まる。事務局の記録ノートのいちばん古い日付は一九六八年九月二六日である。団員の年齢層は若いもの、そこは未来を嘱望された若手研究者のこと、調査に関するフィールドノートへの記載事項の申し合わせや、調査用具の手配などは手慣れた様子で準備が進んでいく。

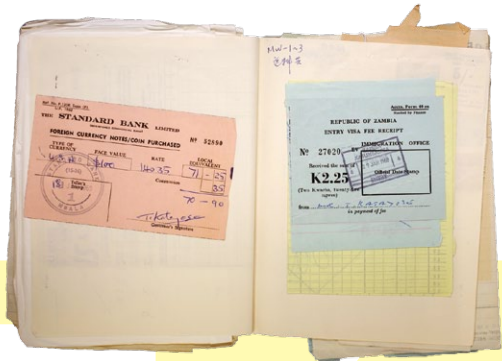
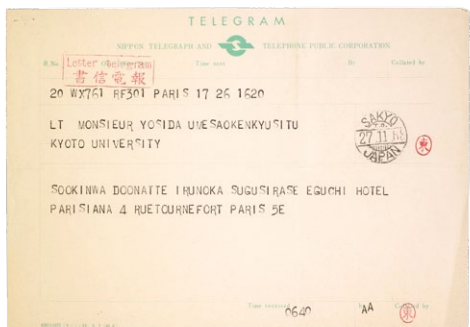


梅棹資料室に保管される当時の資料 (一部)

ところが、今回の任務は、

日本初の万国博覧会開催のための資料収集である。いざ現地に赴くと、国家的プロジェクトならではのトラブルが発生し、若き人類学者たちが悪戦苦闘するさまが、手紙で事務局に次々と伝えられてくる。もっとも多いトラブルは、日本からおこなわれているはずの連絡の行き違いである。調査・収集の便宜供与を図ってもらったため大使館・領事館への依頼が届いておらず、振り込まれているはずの調査資金が振り込まれていないといった事態が頻繁に発生する。その報告を受けた事務局でも対応に追われ、事務局ノートのなかには融通のきかない「お役所仕事」に対する腹立ちを走り書きしたページもある。

一方で、万博という一大事業ならではの事情で調査がスムーズに進んだことも、資料に残されている。来るべき一九七〇年の開催に向けて作られた、万博のワッペンやステッカーが現地で大人気を博し、なかには高額のチップを要求する相手にワッペンをあげたら納得して引き下がった、というものもある。



上: 現地から送金を催促する電報
下: 現地でのレシートも保管されている

半世紀後の歴史的価値

また、半世紀を経て振り返ると、当時の事務的な記録が歴史的に意義をもつ事例も見られる。梅棹忠夫アーカイブズのなかに、事務局による会議録があるのだが、これは梅棹忠夫氏の著作『知的生産の技術』で一躍世間に知られるところとなった、いわゆる「京大式カード」に書かれている。ところが、『知的生産の技術』の初版は一九六九年七月であるのに対し、事務局の会議録の日付は一九六八年八月から始まっている。「京大式カード」による情報整理が広く世に知られる以前の使用例としても貴重なものであろう。

未来から見た過去への口惜しさ

吉岡 乾

民博 人類基礎理論研究部

五〇年という一昔

一九六八年。筆者生誕より一〇年以上も前の話なので、正直ピンと来ない。プラハの春、学生運動、五月革命、小笠原返還。社会学の授業で勉強したことがある、程度のイメージしかない。かつて実際にあった出来事であっても、やがて過去となれば、想像が難しくなる。未だ来ない出来事など、想定できる筈もない。当時の収集团が、五〇年後の現在の世界情勢などを想像できなくても当然である。だが、現在からEEMの収集を見返してみると、それでも「惜しい」と感じる部分がある。

遠い異国を探検していた時代の良し悪し

当時はまだ、海外調査も今ほど多くなく、世界は広域に拡散された情報に乏しかった時代である。となると、そのころの、海外の民族文化を題材とした研究も、それだけ難しかったものであろうし、そんな分野に研究者が多く居たとも思えない。そんななか、二〇名足らずで全世界（大陸中国、ソ連を除く）をカバーして収集しようだなんて、無茶な話である。

だが、時代が良くなかった、早過ぎたと言うこともできない。近年になると、海外渡航のハードルが下がり、反面、観光業としての「文化的」モノ作りも増えている。より純度の高い「本物」

が手に入る最後の時期であったのかも知れない。だからこそ、惜しいのだ。

資料収集のやりかたを惜しむ

筆者はいまだ、「資金を用意したから民族資料を収集してこい」などといった収集を体験したことがない。そういう意味でもEEMはイメージしづらい。だが、生活用具、仮面、神像を集めて、世界各地の民族文化の根源を示そうとしたという発想には、イスラーム圏をフィールドとしている者としては、疑問を抱いてしまう。それでは具体的な形にすることを禁じている文化が拾えないのではないだろうか。

更に筆者のフィールド辺りに寄って言わせて貰えば、一九世紀末期にアフガニスタン北東部でイスラームへの強制改宗を受けた力タ人などがかつて信仰していた多神教が、最後の残滓を流出・散佚させた時期であり、かつ、先にも後にも長い戦乱を忍受している「文明の十字路」アフガニスタンの、一九世紀以降で最高にして唯一の平和な時期でもあった。それなのに、その宗教文化から得られた資料が、神像でもなく葬儀用木彫像のレプリカふたつだけというのは、残念でならない。文献にある本物（写真右）と見比べてみたら、「模造品」と言っているのは、随分と似ていない気もする。



EEMが収集した「祖先像のレプリカ」(左、K0006534・K0006535、写真：六田知弘)とカーブル博物館蔵のカタ人の葬儀用彫像(右)。これは同じ意匠だろうか？(出典：Joseph Hackin (1926) "Les Idoles du Kafiristan" Artibus Asiae, Vol. 1/4.)

二名の団員とも、アフガニスタンやパキスタンは駆け足でとおり過ぎたように読める記録がある。どうしても財政的に、行程の中間であるこの地域では収集のベース配分が難しかったのであろう。もう少し頑張っただけだったものだが、それは団員の力量不足ということではなく、全体のやりかた、つまり、「少数精鋭」の「駆け足収集」だったところに帰属する話である。

本館展示でEEM資料を見る

丹羽 典生

民博 超域フィールド科学研究部

本特集は、特別展「太陽の塔からみんぱくへ——七〇年万博収集資料」に連動しているが、ここでは、ちょっと趣向を変えて、本館展示にあるEEM資料について見ていきたい。EEMが収集した資料は、そもそもみんぱくの開館当時の展示の基礎となっていた。ところが、二〇一

七年に終了した全面的な本館展示の改修のほか、規模が小さいながらも逐次おこなわれた改修にともない、展示場は開館当初とは様変わりして

いる。しかし、いわばそうした変化の波を乗り切ったEEM資料が、今でも少ないながらもあるのだ。

EEM資料を探すときに目印となるのが、資料に付された番号である。標本資料の標本番号がKからはじまる資料の一部が、それに該当する。展示場を順番にめぐっていくと、今EEMの手による収集品を拝めるのは、オセアニア、アフリカ、西アジア、東南アジア、日本の文化の各展示場である。日本を除き、それぞれ数点程度が今でも展示場に鎮座している。そう。今では、そもそもEEM資料が一点もない展示場の方が多いためである。

それでは、地域ごとに見ていきたい。オセアニアでは、三点展示されている。特に目を引くものとしては、ヴァヌアツの「割れ目太鼓」がある。あとの二点は、マーシャル諸島の「海図」となる。アフリカでは、ザンビアの成人儀礼用の仮面と衣装が四点とマリの仮面「チワラウン」の合計五点がある。前者はまとまって展示されているので、見つけやすいのではないだろうか。西アジアでは、「イランのシリア派」のサブセクションのなかに、「牛頭の錫杖」、「殉教劇用鉄兜」、「托鉢僧の斧」の三点を目にすることができる。東南アジアでは、マレーシアの吹き矢の矢筒が一組と、カンボジアの「魚伏せ籠」、フィリピン

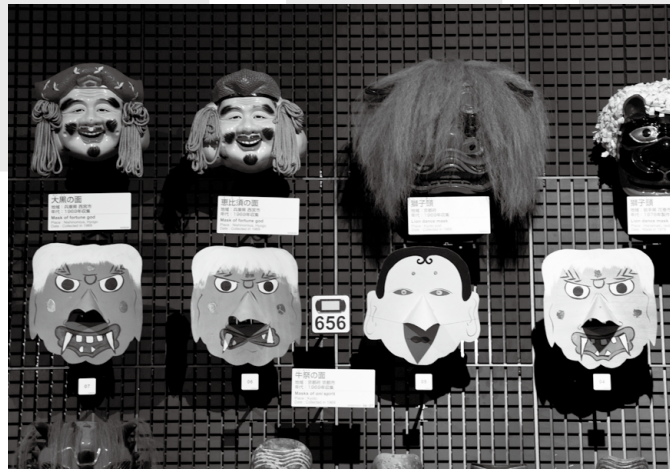


日本の文化展示「里の暮らし」サブセクションに展示中の「田の神」(K0006341・K0006342)

の「背負い籠」の二点となる。いずれも生業関係の資料である。

資料が一番残されているのは、日本である。二点ある。「里のくらし」のサブセクションに三點(田の神二点と綿づくりの道具である「筋切鋸」)ある以外は、すべて「ハレのすがた」のサブセクションで実見できる。後者にあるのは、仮面および仮面の儀礼で使われる道具だ。見た目もおもしろい仮面が取りそろえられているので、ぜひ見つけて欲しい。

心ある有志は、特別展示を鑑賞した後、ぜひ本館展示のなかの万博の名残であるEEM資料を探してみたいかがだろうか。EEMの集めた資料について、また違った見方や楽しみ方が見つかるかもしれない。



日本の文化展示「ハレのすがた」サブセクションに展示中の仮面たち

中国の携帯用万能充電器

よこやま ひろこ
横山 廣子
民博 人類基礎理論研究部



ガラケーの充電器を中国で探してみました
万能充電器を購入した店で、使えるようになった携帯をもつわたし（雲南省昆明市、2017年12月）

出張前日になって、中国で使う携帯の充電器が見つからない。急遽、留学生に電話したところ、中国には「万能充電器」があることを知らされたが……。今や姿を消しつつあるガラパゴス携帯の充電器をめぐるフィールド体験を紹介する。

海外出張前日

昨年一月、多忙が続き、出発前日になって、ようやく荷造りを始めて、わたしは慌てた。いつも中国で使う携帯電話の本体はあるが、充電器がない。前日の準備は山ほどある。少し捜したが、わたしは別の対応策を考えた。

充電器は、二〇〇六年に中国で買ったノキアのシンプルなフイーチャー！フオン、つまり「ガラケー」用であった。ノキアは二〇一〇年代前半に携帯端末事業から撤退し、中国であれだけ目立っていた「諾基亞」の文字を売り場で見ることにはなくなっていた。それでも雲南省の調査村では、まだノキアは使われていた。中古の携帯を売る店があれば、充電器も手に入るのではないかと考え、日本で学ぶ雲南の農村出身の留学生に電話をかけてみた。すると、「ノキアの充電器はちょっと難しいですが、万能充電器を買えばいいです」と言われた。それを使えば、どのメーカーの携帯電話でも、電池への充電ができるということだった。

雲南省では省都の昆明で資料収集と調査をした後、大理のペー族の農村で調査する計画であった。昆明で早速会う予定だった知人には夜のうちにメールを出し、昆明で万能充電器を買う予定だが、それまでは携帯が使えないと知らされた。知人は三十代の大学教員で、すぐに返信が届いた。自分が大学時代には使ったが、誰でもスマートフォンを使う現在、昆明で万能充電器が買えるのだろうか、という内容だった。



わたしが中国国内で使用使用するノキアのガラパゴス携帯

万能充電器を調達する

徹夜で出発し、夜遅く昆明に着いた翌朝は、寝坊をした。まずは雲南の関係者にメールで可能な限りの連絡をし、万能充電器の調達作戦を練ることにした。

携帯ショップは数多くあるが、そこに行っても無駄なことは、前日のトランジットの際、広い香港空港内の携帯ショップを回ってわかってきた。今回は鉄道駅付近のホテルに泊まっている。地方から来る人も行き交うこの地区は、ガラケーを使う人の比率が、ほかよりは高いだろう。この辺で販売店を捜すのは悪くない。

しかし、いざホテル周辺を歩き回っても、万能充電器を売っている店は見当たらない。疲れを感じて入ったレストランで食事をとっていたとき、レジの横にいた店主らしき人が目に入った。髪を短く刈

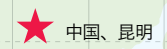


店内に並べられている万能充電器（昆明市、2017年12月）



多数の携帯・スマホ関連の商店が並ぶ通信機器タウンの1フロア（昆明市、2017年12月）

り込み、革ジャンとジーンズの中年男性で、ときばきと店員に指示を出し、店内は清潔に保たれていた。その様子と少数民族居住地域を連想させる店名で、わたしは地方出身の遣り手と判断した。支払い後、「万能充電器を売っている店を知りませんか」と尋ねた。すると、「あるよ。すぐそこだ」と親切に、店の裏側の道沿いにある「通訊城（通信機器タウン）」まで案内してくれた。



★ 中国、昆明

使いこなすまで

「通訊城」内でも探しに探して、万能充電器を扱う店にたどり着いた。店員がその場で実演してくれた。万能充電器には時計の針のような二本の端子が付いていて、二本の間隔を調節しながら電池の電極に接触させる。それを理解し、いそいそとホテルの自室に戻った。



赤と緑のランプがひとつずつ点灯するのは、本来は充電完了のサインだった

充電器の包装箱にある使用法を読むと、正常に電極に装着できたときは緑に点灯するとある。やってみると、赤く点灯した。販売店員の実演でも赤く光っていたのを遠目で見たので、色違いは気にしないことにし、コンセントに差し込んだ。一旦、赤ランプは消えたが、調節すると、赤と緑の二色が点灯した。実演で見た赤と、箱の説明の緑との折衷のような状態だが、わたしはそれで正常に装着できたのだろうと判断し、充電されるのを待った。

しかし、数時間ずつ何度試みても、充電はされなかった。翌朝、購入店を再訪するが、シャッターが下りていて、仕方なく隣の店の人に助けを求めた。その青年は親切に対応してくれたが、充電はできなかった。万能充電器の時代はほとんど去ったのだとさとした。午後に出直し、ようやく前日の店員から、コンセントに挿して赤いランプがふたつ点き、ひとつが点滅するように調整して初めて充電できることを教わった。

左に赤、右に緑が点灯するのは充電が完了し、それ以上充電しないとというサインであった。わたしは充電開始時から大間違いをしていたわけである。大理の調査村で聞くと、現在、ガラケーを使うのは約二割のことだった。万能充電器がすっかり姿を消すのも時間の問題だが、苦勞して使えるようになった万能充電器には愛着を感じてしまう。

開館40周年記念特別展
「太陽の塔からみんなくへ」
70年万博収集資料

1968年から1969年にかけて「日本万国博覧会世界民族資料調査集団」が世界の諸民族の仮面、神像、生活用品を収集しました。収集活動にかかわる書簡や写真とあわせてコレクションの生い立ちを紹介いたします。これらの資料は、70年大阪万博で太陽の塔テーマ館の地下に展示され、現在、みんなくの貴重なコレクションとなっています。



祖先像(ニューヘブリデス諸島、現バヌアツ)

体験コーナー
自分のところに浮かんだ仮面を描いて、みんなくで21世紀の「仮面展示」を完成させましょう。仮面に万博の思い出や未来へのメッセージを書き込んでいただけます。

日時 特別展会期中
会場 特別展示館2階特設コーナー
※申込不要、参加無料(要展示観覧券)

ギャラリートーク
会場 特別展示館
日時 3月10日(土)11時～11時30分
講師 野林厚志(本館 教授)
日時 3月17日(土)11時～11時30分
講師 平井京之介(本館 教授)
日時 3月24日(土)11時～11時30分
講師 伊藤敦規(本館 准教授)
日時 3月31日(土)11時～11時30分
講師 川瀬慈(本館 准教授)
※申込不要、参加無料(要展示観覧券)

開館40周年記念企画展
アイヌ工芸品展
「現れよ、森羅の生命」
木彫家 藤戸竹喜の世界
熊をはじめとする北の動物たちからアイヌ文化伝承者の等身大の彫像まで、藤戸竹喜(1934)の主な作品をとおして、創作活動の軌跡とその背景をたどりま。

公開講演会
「70年万博からみんなくへ」
昨年開館40周年を迎えあらたな一歩を踏み出したみんなくの軌跡と未来について、存分に
日時 3月10日(土)13時30分～16時30分(13時開場)
会場 本館講堂(定員450名)
※申込不要、要展示観覧券
※入場整理券を当日11時から本館2階講堂前にて配布

みんなくゼミナール

日時 3月17日(土)13時30分～15時(13時開場)
会場 本館講堂
定員 450名(当日先着順)
参加費 無料(展示ををご覧になる方は展示観覧券が必要です)
第478回

万博資料収集団
太陽の塔に集った仮面、神像、なりわいの道具



木彫 (台湾)

大阪万博を2年後に控えた1968年、世界の諸民族の資料を収集するというミッションが若き人類学徒たちに与えられました。限られた予算と時間とのなかで世界に挑んだ「万博資料収集団」を紹介します。

みんなくウィークエンド・サロン
研究者と語る
本館の研究者が「現在取り組んでいる研究」調査している地域(国)の最新情報「みんなくの展示資料」について分かりやすくお話しします。

3月4日(日) 14時30分～15時 本館ナヒひろは
イسلام教育における音と文字
話者 相島葉月(本館 准教授)
3月11日(日) 14時30分～15時 特別展示館
特別展「太陽の塔からみんなくへ」
東南アジアを中心に
話者 平井京之介(本館 教授)
3月18日(日) 14時30分～15時 本館ナヒひろは
博物館資料情報の再収集
話者 E.M.北米資料と「ノースコミュニティ」の再会
伊藤敦規(本館 准教授)

語ります。
日時 3月23日(金)18時30分～20時30分(17時30分開場)
会場 オールホール
(大阪市北区梅田、定員480名)
講演 吉田憲司(本館 館長)
パネルディスカッション
石毛直道(本館 名誉教授)
ヤノベケンジ(現代美術家)
吉田憲司(本館 館長)
司会 菅瀬晶子(本館 准教授)
主催 国立民族学博物館、毎日新聞社
※要事前申込、参加無料、先着順、手話通訳あり
お問い合わせ先
研究協力課 研究協力係
06・6878・8209

開館40周年記念シンポジウム
「民族誌コレクションの役割とその未来」
人間の理解にむけた博物館の挑戦
「人間とは何か」という根源的かつ魅力的な問題は、博物館においてどのように考えることができるのでしょうか。本シンポジウムでは、博物館のコレクションから、人間を理解するための切り口を考えます。
日時 3月25日(日)13時30分～16時30分(開場13時)
会場 本館講堂(定員450名)
講演 木下直之(東京大学 教授、静岡県立美術館 館長)
発表 野林厚志(本館 教授)
丹羽典生(本館 准教授)
※申込不要、要展示観覧券

みんなく春の遠足・校外学習
事前見学&ガイダンス
春の遠足・校外学習にむけて、事前見学に来館される学校団体の先生方を対象としたガイダンスを開催します。
日時 4月5日(木)、6日(金)
14時～16時30分
会場 本館第5セミナー室ほか

※参加無料
ホームページから参加申込書をダウンロードし、必要事項を記入の上、FAXにてお送りください。
お申し込み・お問い合わせ先
国立民族学博物館 案内所
電話 06・6878・8341
(10時～17時)
Fax 06・6878・8441
カレッジシアター
「地球探究紀行」
会場 あべのハルカス近鉄本店「スペース9」
※要事前申込(参加状況により当日受付あり)、参加費1000円、定員各回50名
主催 産経新聞社
共催 近鉄文化サロン、スペース9
特別協力 国立民族学博物館
千里文化財団

日本の鵜飼文化
日時 3月14日(水)13時～14時30分
講師 卯田宗平(本館 准教授)
アートと人類学のあいだ
私の履歴書、人文科学の今
日時 3月28日(水)13時～14時30分
講師 吉田憲司(本館 館長)
お申し込み・お問い合わせ先
ウエーブ産経カレッジシアター係
06・6633・9087
●無料観覧日のお知らせ
3月11日(日)は、本館展示と企画展を無料で観覧いただけます。ただし、特別展の観覧は有料となりますので、ご注意ください。
※各イベントについてくわしくはみんなくホームページをご覧ください。
※電話でのお問い合わせの受付時間は、9時～17時(土日祝を除く)です。

3月25日(日) 14時30分～15時 本館ナヒひろは
カーストの歴史的变化——あるバラムン集団の事例
話者 松尾瑞穂(本館 准教授)
※申込不要、参加無料(要展示観覧券)

●みんなく無料シャトルバスのご案内
大阪モノレール「万博記念公園駅」とみんなくの間の直通送迎バスを特別展「太陽の塔からみんなくへ」70年万博資料収集資料の会期中に運行します。
運行日 3月8日(木)～5月29日(火)の土曜・日曜・祝日
1日1往復、所要時間10分、無料
平日、4月21日(土)、22日(日)、28日(土)、29日(日)・祝、30日(月)・振替
※万博記念公園でイベントが開催される場合は臨時に運休することがあります。詳細は本館ホームページをご覧ください。

大阪モノレール 万博記念公園駅発		国立民族学博物館発	
時	万博記念公園駅 →国立民族学博物館	時	国立民族学博物館 →万博記念公園駅
10	06 36	10	50
11	06 36	11	20
12	46	12	30
13	16 46	13	00 30
14	26 56	14	10 40
15	26 56	15	10 40
16		16	30
17		17	00

研究部新メンバー
八木百合子 助教(人類基礎理論研究部)
総合研究大学院大学にて博士号取得後、外務省専門調査員として在ベルー日本国大使館に勤務。本館機関研究員を経て現職。専門はベルーを中心とする南米アンデス地域の民族学研究、とくに現代の宗教文化についての研究。

友の会

友の会講演会

※会員無料(会員証提示)、一般500円
第476回友の会講演会(大阪)
文化遺産としての日本万国博覧会
人類の進歩と調和を再考する

日時 4月7日(土)13時30分～14時40分
会場 本館第5セミナー室(定員96名・当日先着順)
講師 鈴木紀(本館 准教授)
1970年に開催された日本万国博覧会は、世界77カ国が参加し、183日間の会期中に6420万人が入場した昭和の国民的イベントでした。あれから約半世紀、当時のテーマ館の地下展示場を飾った民族資料が国立民族学博物館で再び展示される今春、あらためて万博とはなんだったのかを考えてみたいと思います。万博のテーマとして設定された「人類の進歩と調和」の意味を、太陽の塔と世界各地から集められた民族資料を手掛かりに考察します。
※講演会終了後に講師の案内のもと、特別展の見学会をおこないます(40分、一般参加者は要展示観覧券)。

第122回東京講演会
のこされたミッション
E.M.万博資料収集団からみんなくへ
日時 4月14日(土)13時30分～14時40分
会場 モンベル御徒町店(定員60名・要事前申込)
講師 野林厚志(本館 教授)
1970年に大阪で開催された日本万国博覧会。テーマ館であった太陽の塔の地下には、世界各地の民族資料が展示されてきました。その資料の収集に当たったのが、若い人類学者で構成された「日本万国博覧会世界民族資料調査集団(E.M.)」です。彼らの収集活動から国立民族学博物館の創設にいたる経緯を、当時の記録をもとに紹介します。
※講演会終了後、講師を囲んで懇談会(40分)をおこないます。

第78回体験セミナー
世界の製藍、日本の藍染め
——気候と風土に育まれた色、藍を知る
5月26日(土) [開催地:滋賀県野洲市]
第91回民族学研修の旅
モンゴル、遊牧の民に出会う——揺籃の地オルホン川上流域と草原都市ウランハートを訪ねる
8月8日(水)～15日(水) 8日間

想像界の生物相 ポリネシアの鳥人

民博 人類文明誌研究部 いんとう みちこ
印東 道子



資料名 | 倉庫「パータカ」

標本番号 | H0008069

地域 | ニュージーランド

サイズ | 幅 240 cm × 高さ 300cm × 奥行 320cm

◆◆南の島々と鳥◆◆

「人間が創る不可思議な生物」をオセアニアの島々で探してもなかなか見あたらない。オセアニアでは芸術性豊かな木彫類が多く作られていたが、表象モチーフは祖先神であることが多く、人間の姿がほとんどであった。そのなかで、鳥の要素が人間と組み合わせられたものが、ポリネシアのハワイやニュージーランド、そしてイースター島に見つかる。いわゆる「鳥人」とよばれるモチーフである。頭が鳥で首から下は人間をあらわした岩絵や木彫がイースター島やニュージーランドで見られる。反対に、頭は人間で首から下は鳥をあらわす木彫もイースター島で作られ、メラネシアのソロモン諸島にも見出される。

オセアニアの島々には哺乳類がほとんどおらず、鳥がもつとも広く見られる生物であったため、この結び付きが生まれたと解釈されている。特にポリネシアでは、鳥は予兆の対象であり、親族トテムや死者の霊、そして神の乗り物として認識されるなど、文化的に重要な存在であった。対象となる鳥の種類は島によって異なり、ソロモン諸島ではグンカンドリ、イースター島ではセグロアジサシ、

ニュージーランドやハワイではフクロウなどが重要で、多様に表象された。

イースター島では、人と鳥の結び付きを象徴的にあらわす鳥人信仰がおこなわれていた。イースター島南端のオロンゴから海を見下ろすと、すぐ沖に小さな島が見える。モツヌイ島である。通常は海上で暮らすマヌ・タラとよばれるセグロアジサシは、七月ごろからこの島に降り立って産卵する。毎年、最初の卵を入手した者の主人がその年の鳥人（タンガタ・マヌ）となり、神聖な儀式をとりおこなう権利や栄誉をはじめ、経済的特権も与えられる。現在でもオロンゴでは、鳥人像が刻まれた岩を多く見ることができ

◆◆神と人をつなぐ◆◆

ニュージーランドでは、「鳥人」像が岩絵や魔よけのペンダントなどに見られる一方で、伝統的な集会所「マラエ」内部の柱には、爬虫類的な要素も加わった迫力ある木彫が一面に施されている。マラエに入ってまず目にとまるのは、太い柱に彫刻された祖先像である。アワビを象嵌した丸い目や尖った口から突きだし、舌が特徴的である。その周囲には、マナイアとよばれる精霊が空間を埋めるよ



イースター島の鳥人彫刻(点線で示したのが鳥人)

うに彫刻され、やはりアワビで象嵌された目と尖ったくちばしをもつ。

この独特のマオリ彫刻は、パータカとよばれる貯蔵小屋の外壁や柱にも施され、民博の本館展示でも見ることができ。正面上部の装飾柱は祖先神であるが、周囲の壁にはマナイアや豊穡をもたらすクジラが表現されている。マナイアは祖先神のマナ（超自然力）を人間に伝える役割をもつと考えられており、ポリネシア人が鳥に対してもついていた認識（神と人をつなぐ存在）と相通じるものがあった興味深い。

新世紀ミュージアム

博物館の展示は時代を反映する。このことは、展示の内容が世界情勢を投影するという意味にとどまるものではない。国家の意味が問い直されている現代、博物館の使命もあらためて問われている。ドイツの博物館の試みを紹介する。



MEKアルニムアレー入口 (2017年)
© Staatliche Museen zu Berlin, Museum Europäischer Kulturen / David von Becker

ヨーロッパ諸文化博物館は、一九九九年に設立された。通称は頭文字をとってMEK(メック)という。MEKは、プロイセン文化財ヘルリン国立博物館群の一翼を担う博物館である。

ホワイエと「時事ショーウィンドウ」

重厚な木製の扉をあけると、談話室のような空間が広がる。左手にクローク兼受付があり、前方奥が左右に分かれて展示場につづく。いくつかのテーブルが配されていて、来館者が待ち合わせに使うことも、書き物をする 것도できる。この居心地のいいホワイエ

に、「時事ショーウィンドウ」コーナーもある。現代社会のできごとと関連の深い収蔵物を一点選んで展示するもので、時事問題に歴史のパススペクティヴを与えることを意図している。このコーナーは二〇一四年、ウクライナとロシアのクリミア半島危機を契機につくられた。

二〇一五年には「HIV、AIDS犠牲者の記憶」として、ベルリンのエイズ犠牲者に関する展示をした。そのときホワイエには、エイズ・メモリアル・キルト運動のキルトが飾られ、企画展示場ではパッチワークのワークショップが開催されていた。

二〇一八年一月現在は「エリス島(アメリカ合衆国)——希望の島、涙の島」と題した写真が展示されている。移民・難民を扱って特に大きな反響のあった企画展「ホーム——難民生活への洞察」(二〇一六年七月〜二〇一七年七月)が終了したのちも、社会的関心の高いこ

第一は、現代社会を民族誌的に描く企画展で、カメラマンとの共同制作などがある。前掲の「ホーム——難民生活への洞察」は、難民の芸術家と博物館スタッフが協力して展示をつくった。

アルバニア、アフガニスタン、ボスニア、イラク、コンボ、パキスタン、シリア出身の芸術家たちがKUNSTASJYL(ドイツ語で「芸術アジール」というグループを結成し、難民経験をテーマに制作した作品や証言映像を展示した。参加した芸術家の多くはベルリン、スパンダウの難民収容施設に居住しているか、居住した経験がある人びとだった。会期終盤には、日曜日の午後を無



MEKのスタッフ (2015年当時)
© Staatliche Museen zu Berlin, Museum Europäischer Kulturen / Ute Franz-Scarciglia

料観覧とし、作者が自らの展示物について来館者と対話する機会を設けた。

第二のカテゴリーは、機織や刺繍、キルトなど「衣」にかかわる展示である。会期中は多くのワークショップが開催され、MEKの企画に市民が参加する重要な機会になっている。最新の「ウーラー00パーセント」(二〇一七年一月〜二〇一九年六月)は、羊飼いの生活から魔法の絨毯まで、毛糸つくりの工程や商品生産を含めて展示する。

第三のカテゴリーは、MEKの収蔵資料を公開するものである。毎年二月に開催されるクリスマス企画展は、根強いファンをもつ。

沿革

ところで、MEKの設立は一九九九年であるが、その前身の歴史をたどると一八八九年にルドルフ・ヴィルヒョウが設立した「ドイツ民俗衣装と家内生産のための博物館」に起源をもつ。設立当初からアドルフ・バステリアンが初代館長を務め、フランツ・ポアズも渡米前に身をおいていた民族学博物館(一八七三年設立)と深い関係をもっていた。のちに「ドイツ民俗学博物館」と改称し、ベルリンが東西に分断された冷戦時代は、東西ふたつの民俗学博

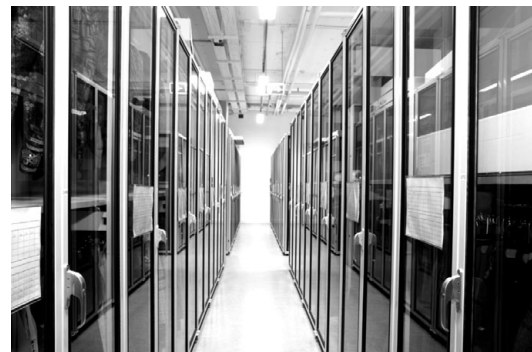
のテーマを継続し、歴史的に展開したものである。

常設展と企画展

ホワイエ奥を右に進むと常設展示場、左に進むと企画展示場である。常設展は、「文化の接触」をテーマとして、商売、旅行、移民、戦争などを介してさまざまな文化が出会い、混じり合って今日のヨーロッパが成っていることを示す。企画展は、常時複数開催されている。期間を区切って開催される企画展は、博物館スタッフが館外のエキスパートと協力してつくることが多い。およそ三つのカテゴリーでとらえることができる。



ホワイエに飾られたエイズ・メモリアル・キルト運動のキルト (2015年)



MEKのテキスタイル収蔵庫
© Staatliche Museen zu Berlin, Museum Europäischer Kulturen / Ute Franz-Scarciglia

博物館が存在した。東西ベルリンの再統一を受けて一九九二年に東西の民俗学博物館が統合される。注目すべきなのはその後である。一九九九年、民俗学博物館は、民族学博物館の世界の諸民族文化コレクションのうちのヨーロッパ・コレクションを引き継ぎ、従来の民俗学博物館のコレクションと合わせて、あらたにMEKとしてスタートした。MEKが二〇世紀の民俗学博物館と異なるのは、それがドイツという国民国家の文化に関する博物館ではなく、複数形の「ヨーロッパ諸文化」の博物館だということである。それはドイツが二〇世紀にたどった歴史やその後の世界の秩序を投影するものである。

被災地で手芸を「仕事」にする

かみだ
金谷 美和

民博 外来研究員

商品の価値を決定するのは、品質や作り手の技術だけではない。人びとがそれに対して抱くイメージが価値判断に作用することもある。今回で最終回を迎える「手芸考」では、市場に映し出される「手芸」のイメージを被災地の事例から考える。

被災者の癒しを目的とするものや、収益を被災地に還元することを目的とするものがあった。そのような活動から、商品を製作して、手芸を仕事にしようとする女性たちがあらわれている。収入と社会的認知を得ることにやりがいを感じる反面、手芸に対する価値付けの低さから仕事にしがらみ状況もある。

手芸で時間をやりすこす

なごみ会は、宮城県石巻市の仮設住宅に暮らす、武山たか子さん、武山幸子さん、三條照子さんが集まる手芸グループである。集団移転地の整備に時間がかかり、震災から七年経過した今でも仮設住宅から出られないでいる。震災の年の初盆のころ、彼女



なごみ会のメンバーが製作した布ぞうり(2015年)



亡くなった児童の供養のため、被災地ではお地蔵さんのマスコットが作られた。これは、お寺に奉納されたお地蔵さん(2013年)

たちが最初に作ったのは、お地蔵さんのマスコットだった。この地区では、津波で大勢の子供が亡くなった。孫の供養のために、お地蔵さんを作ることが慰めになったという。同じころ、ボランティア団体がひらいた手芸の集まりに参加して、気の合う仲間

どうしでなごみ会をつくった。忘れるためにやってたんだ、と照子さんは言う。仮設住宅に一人で座っていると、将来の不安がよぎって、いろいろなことを考えてしまう。だから、何かすることがある、というのはとても良かったのだという。女性たちの多くは、三世帯同居の広い家で家事や育児を切り盛りし、農業や漁業などの家業を担い、日々忙しく働いてきた。津波で家や仕事を失い、突然することがなくなってしまうのである。

手芸を仕事にする

震災から八カ月経ったころ、彼女たちは布ぞうりの製作を始めた。生業の再開が遅れるなか、収入になる手仕事を選択したのだ。ボランティア団体が、被災地の雇用創出を目的として取り組み始めたもので、現在は、一般社団法人あゆみが運営する「ふっくら布ぞうりの会」として事業化されている。布ぞうりとは、従来はワラを素材として作られたものを、布で作るようになったものだ。これまでの布ぞうりは、編み目がゆったりして素朴なものが多かったが、この会が作るうとしたのは、特別な技法に基づいてしっかりと編み込まれた、デザインが洗練されたものである。一般的な布ぞうりの価格は一五〇〇円前後であるが、この



仮設住宅の集会所でおこなわれた、布ぞうりの編み手さんたちの集まり(2015年)

会のもものは五〇〇円以上であり、ネット販売されている。

照子さんたちは、技術を習得して、布ぞうりの編み手になった。会から発注がくると、編み手は仕様にしたがって製作し、製品は検品を経て買いとられる。会は布ぞうりを、技術に裏付けられた「職人の仕事」と位置付けており、品質の維持に心を配っているために、厳しい検品を実施している。検品にとおらないものは、編み手に返され、自分で販売先を確保しなければならぬ。彼女たちは、仕事としておこなう手芸の厳しさを感じている。

一方で、この仕事に楽しみも見出ししている。ほかの地域で製作する仲間と交流したり、集まりの様子をSNSで発信したりしている。会のウェブサイトにはなごみ会のインタビュー記事が掲載され、地元テレビでも取り上げられるなど、社会的な認知を獲得したことや、自由に使える収入を確保していることが、自信と達成感につながっている。

「職人仕事」と「手芸」

震災から年数が経つにつれて、復興支援のイベントが少なくなり、なごみ会は、検品からもどされた商品の販売先を見つけるのに苦労している。地元で、女性の手芸品が販売される場所のひとつとして、道の駅がある。そこでは、女性の手芸品が比較的安価で販売されている。なぜなら、手芸は女性の趣味の創作活動であるため、そこから生まれる商品の価格も低いという通念が定着してしまっているからである。なごみ会の布ぞうりは、検品にとおらなかったとはいえず、「職人仕事」である。にもかかわらず、道の駅では品質に見合った価格を付けてもらえないという事態が生じている。「手芸」に付された趣味的、女性的なイメージが、手芸を「仕事」として成立させることとの障壁になっているのである。

新地名誕生！



What's in a name?



吉枝 聡子

東京外国語大学准教授

四力国にまたがって分布する、イラン系パミール諸語に属する言語である。ちなみに「パミール」とは、「高地にある放牧地」を指す。

ここに住むワヒーの人びとは、過去にワハン回廊からパキスタン側へ移住してきたと考えられてい



ゴジャールの名峰Tuzupdan(トゥポブタン、6106メートル)。山名はtupop(トゥポブ、ワヒー語「日の当たる」)とdan(タン、ブルシヤスキー語「石」)からの合成語。異なる言語からの合成語はめずらしい

kur「酒谷」、yar「石」、band「崖」、kor「陰崖」、gal「場」、Carlesn「ザレ場、岩なだれ」、sar「峰」、yaz「氷河」、qir「斜面、坂」、wiyin「峠」、prien「人工の峡谷道」、kelc「岩場に造った臨時のシェルター」、woos「水路」、xooig「水車小屋」、hel「夏营地」、goz「牧草地」、dast「未開墾地」、yor「石ころだらけの」。これは、筆者が言語調査をおこなっているフィールドの地名にもっともよく登場する語の一部である。これを見ただけで、この地域が氷河を有する急峻な山岳地帯に位置しており、住民は氷河のふもと石ころだらけの傾斜地を、水路を引き、開墾して灌漑し、半農半牧の生活を送っていることが、容易に想像できるだろう。

この地域とは、パキスタン北部、ゴジャール(北フンザ)とよばれる地方だ。カラコルム山脈の西側、パミール高原の東側に位置する。ここで話されるワヒー語は、パキスタン、タジキスタン、アフガニスタン、中国の

る。上にあげた語を含む諸地名は、彼らが故地から牧草地を求めて移動し、自然条件の厳しいこの地に定着するまでの、苦難の過程をあらわすものともいえる。

ワヒー語の地名には、興味深い語構成をもつものがある。それは、yas wšitk「馬が怖じ気づいた」(wšitk || wšuk「恐れる」の過去分詞)、kingas wšak「タカが疲れた」(wšak || wzak「疲れる」の過去分詞)のように、過去分詞句が地名となるものである。つまり、「馬がたじろぐほどの急峻な岩場」という意味の地名を、前半の修飾語部分だけで作っているのである。日本語にすると「馬恐れ」「タカ疲れ」といったところか。この種の地名でいちばん多いのは、plak「落ちた、転んだ」と diyek「打った」を含むものだ。いわく、dowaiso plak「ドワラトシヨーさんが落ちた(または転んだ)」、šodige yas plak「シヨードビーグさんの馬が落ちた」、ramaiioe Carzi diyek「ラマティロー(≪Rahmatullah)さんが岩なだれに遭った」などなど。いずれも、村から山の放牧地に向かう経路の難所を指すことが多い。

ちなみに、筆者が言語調査に行き始めてから、新しい地名が少なくともひとつ増えた。ある夏、ヤクの名称調査で夏营地へ向かうために氷河を横断している際に、同行の日本人研究者が斜面から滑落した。幸い大事には至らなかつたのだが、我々が調査を終えて帰るころには、この地点は「Kojj plak(コージ転び)」と命名されていた。いうまでもなく、Kojjとは落ちた同行者の名前である。我々は図らずも、あらたな地名が生まれる希有な瞬間を、身をもって体験したのだった。

編集後記

本号で表紙の右上に「みんなぱくは開館40周年を迎えました」と銘打たれた『月刊みんなぱく』は最後となる。そうした号を、みんなぱく開館前の収集をテーマとする特別展「太陽の塔からみんなぱくへ——70年万博収集資料」と関係する万博資料収集団の特集で、幸いにも飾ることができた。編集室としても、本館とも関係の深いテーマだけにまだまだ取り上げたいトピックがあり、企画段階で絞り込むのに苦労した。

ところでこの欄を執筆している時点で、正月のテレビ番組で日本人のコメディアンが顔を黒塗りしたことが、一部で議論を巻き起こしている。小生はテレビを一切見ないので詳細は不案内だが、本誌2017年7月号の特集「異国をまとう」でまさにこうした問題を扱っただけに、議論の行く末を興味深く見守っている。ご関心のある向きはぜひ本誌のバックナンバーもご覧いただくと幸いである。

なお今号が刊行される3月をもって伊東道子教授（本誌の第10代編集長）、横山廣子教授が退職となる。『月刊みんなぱく』へも長年にわたりご寄稿いただきました。ありがとうございます。（丹羽典生）

●表紙：EEMが収集した世界の仮面。写真：六田知弘
（左上からケニア、ハンガリー、マレーシア：K0006473、韓国、コロンビア）

次号の予告

特集

「障害で気づく、障害が築く」（仮）

みんなぱくをもっと楽しみたい 人のために——会員制度のご案内

国立民族学博物館友の会

本館展示の無料入館や特別展示の観覧料割引にくわえ、『月刊みんなぱく』や会員機関誌『季刊民族学』などの定期刊行物や、毎月の友の会講演会、セミナーなどを通して多様な文化の情報を提供しています。

みんなぱくフリーパス

1年間、本館展示へ何度でも無料で入館いただけます（特別展示は観覧料割引）。他にも、みんなぱくを楽しむための特典がいっぱいあります。

国立民族学博物館キャンパスメンバーズ

みんなぱくと大学等教育機関との連携を図り、文化人類学、民族学にふれる学びの場を提供することを目的とした会員制度です。

詳細については、一般財団法人千里文化財団までお問い合わせください。
（電話06-6877-8893 / 平日9:00～17:00）

月刊みんなぱく 2018年3月号

第42巻第3号通巻第486号 2018年3月1日発行

編集・発行 人間文化研究機構 国立民族学博物館

〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園 10-1
電話 06-6876-2151

発行人 園田直子

編集委員 丹羽典生（編集長） 寺村裕史 三島禎子
南真木人 山中由里子 吉岡乾

デザイン 宮谷一欒 長岡綾子

制作・協力 一般財団法人 千里文化財団

印刷 能登印刷株式会社

*本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係にお願いします。

*本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

交通案内

- 大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分。
- 阪急茨木市駅・JR茨木駅から近鉄バスで「万博記念公園駅（エキスポシティ前）」「日本庭園前」下車、徒歩約13分。
- 乗用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」（有料）から徒歩約5分。「日本庭園前ゲート」横にある民博専用通行口をお通りください。
- タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れてきます。

みんなぱくホームページ

<http://www.minpaku.ac.jp/>

みんなぱくフェイスブック

<https://www.facebook.com/MINPAKU.official/>

みんなぱくツイッター

<https://twitter.com/MINPAKUofficial>



みんなのはくぶつかん みんなぱく

MINPAKU

開館40周年記念展示 関連商品のご案内



カバー

本体表紙

特別展オリジナル
クリアファイル

A4判1種 324円(税込)

A5判4種 270円(税込)



ミュージアム・ショップでは、各展示の図録、関連商品を取り揃えております。ぜひお立ち寄りください。

国立民族学博物館ミュージアム・ショップ

e-mail : contact@senri-f.or.jp 水曜日定休

特別展図録

『太陽の塔からみんなぱくへ—70年万博収集資料』

編者：野林厚志

発行：国立民族学博物館

全216ページ、W182×H230(mm)

予定価格：1,944円(税込)

開館40周年を締めくくる特別展「太陽の塔からみんなぱくへ—70年万博収集資料」がまもなく開幕いたします(3月8日～5月29日)。民族学博物館の設立を見ずえて50年前に収集され、その後実際に本館展示のいしずえとなった世界各地の民族資料の数々をお披露目いたします。

繊細かつダイナミックに刻まれた、藤戸竹喜氏の木彫を展示する企画展「現れよ。森羅の生命—木彫家藤戸竹喜の世界」も開催中です(3月13日まで)。

人びとの創造力を体感できる記念展示をお見逃しなく！

企画展図録

『現れよ。森羅の生命—木彫家 藤戸竹喜の世界』

編集：(公財)アイヌ文化振興・研究推進機構

発行：千里文化財団

全248ページ、A4判、1,944円(税込)

